

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(……の左側は口語訳です。)

今はむかし、物ごと自慢くさは未練のゆへなり。物の上手の上から

どんなことでも
やたらに自慢したがる
未熟

は、すこしも自慢はせぬ事也。我より手上的の者ども、広き天下にいかほ

技量がすぐれている

どもあるなり。諸芸ばかりに限らず、侍道にも武辺・口上以下、さらに

武芸……弁舌……
おつた

自慢はならぬものを、今の世は、貴賤上下それぞれに自慢して、声高に

身分が高い人も低い人も

荒唐はきちらし、わがままをする者多し。その癖に、をのれが疵をかくさん

隠そう

とて、よき者を誹り笑ふ事あり。ある者、座敷をたてて絵を描かする。

非難

座敷を作つてふすまに

白鷺の一色を望む。絵描き、「心得たり。」とて焼筆をあつる。亭主の

※
焼筆で下絵を描いた

いはく、「いづれも良ささうなれども、此白鷺の飛びあがりたる、

羽づかひがかやうでは、飛ばれまい。」といふ。絵描きのいはく、「いや

いや此飛びやうが第一の出来物ぢや。」といふうちに、本の白鷺が四五

飛び方……

本当の

羽うちつれて飛ぶ。亭主これを見て、「あれ見給へ。あのやうに描きたい

ものぢや。」といへば、絵描きこれを見て、「いやいやあの羽づかひでは

あつてこそ、それがしが描いたやうには、得飛ぶまい。」といふた。

飛ぶことはできない

『浮世物語』による。

(注) ※焼筆……細長い木の端を焼きこがして作った筆。

問1 望むとありますが、これは誰が望んだのですか。最も適切なも

のを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア よき者 イ 白鷺 ウ 絵描き エ 亭主

問2 羽づかひがかやうではとありますが、この部分を「現代仮名遣

い」に直し、すべてひらがなで書きなさい。

問3 ③ 第一の出来物^{できもの} は、「もっともすぐれた点」という意味ですが、

ここでは何を指していますか。次の空欄にあてはまる内容を十五字以内で書きなさい。

を指している。

問4 次は、この文章を読んだあとの先生とAさんの会話です。空欄

I にあてはまる内容を本文中から二十字以内で探し、そのはじめの五字を書き抜きなさい。

Aさん「先生、この文章を図書館で調べたところ、『自慢するは下手芸といふ事』という題がついていることがわかりました。」

先生「この文章は、前半では自慢する人の未熟さを述べ、後半ではそれを笑い話で説明しています。後半の登場人物が、『をのれが疵^{きず}をかくさん』としている様子は、どこに表現されているかわかりますか。」

Aさん「本当の白鷺^{しらぎ}を見ても、『
I
』と負
け惜しみを言っているところですよ。」

先生「そのとおりです。」

問 4		問 3	問 2	問 1

問
1

（エ）

問
2

（はづかいがかようでは）

問
3

（例）絵描きの描いた白さぎの飛び方

問
4

それがしが

（備考）問3 ○内容・表現に応じて、部分点を認める。

問2 「はづかひ」は「はづかい」、「かやうでは」「かようでは」と改める。

〈歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直すときのきまり〉

・語頭と助詞以外の『はひふへほ』は、『わいうえお』に直す。

(例 あはれ…あわれ おもふ…おもふ)

・『ア段の音＋う』は『オ段の音＋う』と直す。(例 まうす…もうす)

問3 傍線部の直前に「飛びやう(飛び方)」とあり、それについて「第一の出来物」と言っている。誰が描いた何の飛び方かを含めて、具体的にまとめる。

問4 **ポイント** 文章の後半部分の内容を整理する。亭主がふすまに白鷺の絵を描かせたが、描かれた白鷺を見た亭主は、どの鳥もよい出来

だが、飛び上がっているこの鳥の翼の様子では飛べないだろうと言った。すると、絵描きは、いや、この飛び方が一番です、と答えた。そのうち、本当の白鷺が飛んだので、亭主は、あれを見なさい。あのよう描いてほしいと言うと、絵描きは、あのような翼の様子では、自分が描いた白鷺のように飛ぶことはできまいと言った、という内容である。白鷺の飛び方を正しく描けていないのに、それを指摘されると、自分が描いた白鷺の飛び方の方がよいと言い訳しているところが、空欄直後の「負け惜しみ」に当たる。